# 授業実践報告～日本と中国の体育授業の違い

高見　潤
教職大学院学校経営コース２年

今回、南奥実験学校で４年生を対象に体つくり運動を行い、自分の体への気付きや友達との交流を取り入れた授業を公開した。

体つくり運動は、運動の仕方を知りながら、体を動かす心地よさを味わったり、結果として基本的な動きを身に付けたりすることをねらっている。さらに、運動することで心と体が変化することに気付かせたり、仲間とともに運動する楽しさを実感させたりしながら、量的な向上だけでなく、動きの幅や質（スムースさや安定性）を向上させることが求められる。

また、思考を深められるような運動を取り入れたり、自らが動きを考えたり工夫したりできる場を設定したりすることも大切な要件となる。このような気付きと交流を感じてもらいたいと考えた。

初めに、ペアで手をつなぎ、スキップしたりバランスをとったりする運動を行った。簡単な動きであれば、自分たちが思うように体を動かせるが、その後に『なべなべ底抜け』を行ったところ、思うようにいかないケース（課題）が生じた。子どもたちに、「どうやったらうまくできるか。」と問うたところ、スキップやバランスの経験から、「体の動かし方を友達と相談すればできそう。」「掛け声でタイミングを合わせればいい。」という声が返ってきた。そこで、上記と同様の意味の、

「和朋友一边说话一边运动」
「和朋友一边商量一边运动」
「交流很重要」
というカードを表示したところ、「わかった」というように頷いたり、「何回でもできる」ということをアピールしたりする姿が見られた。この段階で、子どもたちは『運動の仕方を友達と相談し、解決しながら取り組む』という本時の学習の見方考え方を持てた。

その後、手の繋ぎ方を変えた『なべなべ底抜け』や大勢で絡んだ腕を解いていく『人間知恵の輪』の二つの運動を行った。どちらも

複数の抜け方（返り方）があるが、ペアや同じグループになった友達に対して、自分から積極的に話し掛け、熱心に運動に取り組む子が多かった。友達との適切な関わり方が分かり、相談すればできそうだという見通しを持って運動する姿が随所に見られた。しかし、友達との関わりが楽しくて、目的を見失ってしまっているペアやグループも見られた。

考えられる理由は二つある。

一つは今回の授業が、子どもたちのニーズに合っていなかったから。もう一つは、ともに相談しながら運動したり解決したりする学び方に子どもたちが慣れていなかったから。つまり、いつもの授業との違いに戸惑ったから。このどちらか（または、どちらも）ではないかと考えた。南奥実験学校の掲先生のマット運動(3 年生)を参観させていただいたが、自分の授業で子どもが感じたであろう違いは、日本と中国の体育授業の在り方の違いではないかと感じた。

どちらの国の教師も、子どもを体育授業に積極的に取り組ませ、運動する楽しさを味わわせたい、という思いが根底にある。違いは、体育を通して身に付けさせたい力の捉えではないかと思う。中国では、その運動の基礎基本を身に付けることに主眼を置いて指導し、日本は、その運動がどうやったらできるようになるか考える力を身に付けさせることをねらいとしている点である。中国で参観した他の教科の授業にも通ずることであるが、中国の先生方がされた授業は、その多くが「まず基本を身に付けさせて、その後応用に生かす」というスタイルだった。日本でも基礎基本の習得に特化した授業はあるが、それは場合や内容によるところが大きい。

どちらの授業がよいかではなく、授業の目的の相違が、授業づくりの見方考え方の違いとなっているのではないかと感じた。

恵州附属学校の先生の話に、「近年、中国も大きく変化する社会への対応を考えている」という内容があった。この変化への対応の仕方が両国のスタンスの違いになっているように感じた。

今回、中国で体育授業を行い、とても貴重な経験を積むことができた。どちらの国の子どもも体育に限らず、熱心に学び、自分のためになる力をたくさん習得して、次代を担う大人になっていってほしい。協議会や懇親会など、様々な場面で言われた「アジアの国々の子どもたちの学びの充実」の一端を担えるよう、今後も研鑽を積んでいきたい。